

日本クザーヌス学会——紹介と現状

ニコラウス・クザーヌス (Nicolaus Cusanus) についての研究を主たる目的とする日本クザーヌス学会 (大出哲会長) は、1882年の秋に発足した。以来、中世哲学会の大会に接続して開催する毎年一回の大会を中心に活動を続けて、今日に至っている。しかしながら大会での研究発表のテーマは必ずしもクザーヌスそのものに限られることはなく、クザーヌスに影響を与えた新プラトン主義から、クザーヌスからの影響が考えられるルネサンスまで多彩である。

さて、この学会の中心的研究対象となっている15世紀の思想家ニコラウス・クザーヌスは、その起伏に富んだ生涯と共に、思想もまた極めて多面的なものがある。彼は、ドイツ西南部のモーゼル河畔の町ベルンカステル・コースに一船主の息子として生まれた後、ハイデルベルク、パドア、パリ等での勉学を経て、教会法学者として社会的活動を始めた。しかし、その活動の中で、自ら聖職者として教会の核心を支える召命を感じて、ケルンで神学と哲学を修めた後、20歳代の終わりに聖職者として叙品された。そしてコブレンツの一教会の助祭としての活動の傍ら、教会法の若き俊英としてトリアの司教区で頭角を現し、その結果、折から開催中のバーゼル公会議にマンダーシャイト大公の代理人として派遣された。そこでもまた、その鋭利な弁論によってたちまち注目を浴びる存在となるが、その公会議を二分して争っていた教皇派と公会議派のうちの後者に、自らの立脚点を置いた。

しかし、数年の後、ローマ教会内部の統一の保持、さらにはローマ教会とギリシア教会との統一の実現のためには、教皇の力を強化するのがより現実的であると考えた彼は、その立脚点を教皇派に変える。そして、以降、歴代教皇の「ヘラクレス(懐刀)」としてローマで活動しつつ、一市民の子としては当時の教会で異例なほどの栄進を遂げた。そして40歳代の最後の年に、ついには枢機卿にまで上げられ、教会全体の改革に力を注ぐと共に、ブリクセンの司教として自己の司教区の根本的な改革にも邁進した。しかしその改革への熱意のゆえに、自らの命を兵士の刃にさらすことになった危険も含めて、彼の晩年はけっして平穏なものではなく、また自ら満足できるものでもなかった。

このような波瀾に富んだ実践生活のただ中で、寸暇を惜しんで紡ぎ出されたクザヌスの思索は、決して体系が前面に出ているものではないが、自身の様々な着想に基づく多彩な要素をもちつつ、神・真理の探究という一点では一貫している。それは、単に彼自身の個人的な特質と経験の反映というのみならず、彼の生きた時代の反映でもあるに違いない。

「Docta ignorantia」で代表される彼の思想は、既によく指摘されているように、新プラトン主義的思想、神秘主義的要素が色濃いのであるが、それが、後の自然科学となるような関心と探究の方法と同居している。また、政治思想として興味深い面もあれば、キリスト教神学の説教理論として注目されている面もある。

また、現代の諸思想の展開にも多彩な影響を与えており、ロンバッハの Struktur-Ontologie (構造存在論) の先駆とみなされる要素もあれば、ベルタランフィによってシステム理論の先駆として扱われるという要素もある。

しかしながら、クザヌスという研究対象には、まだ手つかずのままである分野も多く、また、その理解が一面的に止まっていることも少なくない。このことは、ヨーロッパでもそうであるので、日本においていっそう当てはまるのは、言うまでもない。その意味でクザヌスは、多くの人にとって興味深い研究テーマであるだろう。

さて、日本クザヌス学会は、行方事業として、「大会の開催、会報の発行、クザヌスに関する翻訳・出版、論文集の発行、クザヌス文献の紹介、海外のクザヌス研究団体との交流、その他必要とする諸事業」と会則第3条に定めている。1982年に発足以来、以上の諸事業を、けっして充分とは言えないものの、とにかく推進して来ている。例えば、大会の開催は、会員諸氏の積極的な尽力および各大学の好意的な協力によって、中世哲学会大会に従って全国各地で開催している。大会後の懇親会は、小さな学会であるだけに、毎回、参加全会員が近況報告をすることが可能であり、それによって情報交換と親睦が図られている。会報は毎年二回発行して、学会そのものの活動報告の他に、クザヌス関係の内外の文献の紹介等もしている。また、論文集としては、学会編の『クザヌス研究序説』を国文社から1986年に刊行した。これには、クザヌスの主要著作に関する研究論文に加えて、クザヌス研究のための案内および邦文のクザヌス研究論文のリストも収められている。さらに1991年からは学会誌『クザヌス研究』(Studia Cusana) を、隔年に刊行しており、今年は第3号を

刊行する。

また、クザーヌスの著作の翻訳は、直接に学会の事業ではないが、会員によって着々と果たされている。これまでに訳された著作には以下のものがある。主著“*De docta ignorantia*”の翻訳は、既に1967年に岩崎允胤と大出哲によって『知ある無知』(創文社)として出版されていたが、昨年には新たに山田桂三によって『学識ある無知』(平凡社)として刊行された。また、クザーヌス中期の小品、“*De deo abscondito*”, “*De quaerendo deum*”, “*De filiatione dei*”も、大出哲および坂本堯両氏によって『隠れたる神』(創文社)として1972年に刊行されている。さらに1987年には、“*De possess*”が、大出哲・八巻和彦訳『可能現実存在』(国文社)として刊行された。さらに92年には、松山康国訳、塩路憲一訳註により“*De non aliud*”が『非他なるもの』(創文社)として出版され、また同年には、“*De genesi*”(酒井紀幸訳『創造についての対話』)、“*Idiota de sapientia*”(小山宙丸訳『知恵に関する無学者の対話』)、“*De pace fidei*”(八巻和彦訳『信仰の平和』)および“*De apice theoriae*”(佐藤直子訳『テオリアの最高段階について』)が、『中世思想原典集成』(平凡社)の第17巻、小山宙丸監修『中世末期の神秘思想』に一挙に収められて世に出た。さらに、94年には“*De dato patris luminum*”が、大出哲・高岡尚訳の『光の父の贈り物』(国文社)として刊行された。しかしながら、翻訳紹介されるべき著作がまだ残っているので、今後の課題である。

もう一つの事業としての海外のクザーヌス研究団体との交流活動では、クザーヌスの故郷にほど近いドイツのトリア大学付属クザーヌス研究所および *Cusanus-Gesellschaft* (クザーヌス協会) はもとより、トリアのクザーヌス研究所とともに *Opera Omnia* (クザーヌス全集) の編纂事業をおこなっているケルンのトマス研究所、さらには、渡辺守道という日本人の会長を戴くアメリカ・クザーヌス学会とも密接な連絡をもっている。トリアで数年毎に開催される国際クザーヌス・シンポジウムには毎回数名の会員が参加している。ドイツおよびアメリカのクザーヌス研究者が大いに友好的であるので、この交流は今後さらに深まるであろう。また、当方としても、外国の学会に出向くことだけではなく、種々の公的研究資金を活用して、日本でクザーヌスに関する国際コロキウム等の開催を企画すべき段階になっているだろう。

あと6年後の2001年にはクザーヌス生誕600年を迎えることになる。それに向けて、

日本クザーヌス学会および本日のクザーヌス研究者としてなすべきことがたくさん残されているのではないかと考えているところである。また、広く近現代に対する根本的反省の必要が説かれつつある今日、中世と近代の「敷居」に立っていたニコラウス・クザーヌスの思想 (H. Blumenberg) は、その反省的思索に有効な資料を与えてくれる可能性がある。

日本クザーヌス学会は、会員総数約六十名の小さな学会である。しかし小さい学会だけにできる小回りというものがある。それを、これからもいっそう発揮していきたい。滞日経験が長く、本学会の名誉会長でもある P. ネメシギ上智大学教授は、「pax (平和) と concordantia (和合) を多方面にわたって追求したクザーヌスの思想は、とりわけ日本人に馴染み深いものがあるに違いない」と、繰り返し語っておられるが、クザーヌスに関心をお持ちの方、また、これからあの辺りを研究してみようという方の参加を、日本クザーヌス学会は心から歓迎する。会費は年額 2,000 円であり、事務所は、早稲田大学文学部の小山宙丸教授の研究室 (〒162 東京都新宿区戸山 1・24・1) に置かれている。 (八巻和彦)

東京ボナヴェントゥラ研究所——紹介と現状

本研究所は、1983 年 10 月 2 日、ミュンヘン大学グラーブマン研究所長ヴェルナー・デットロフ教授により創立された。所在地は、聖アントニオ神学院内である。因みに住所と電話番号は、東京都世田谷区瀬田 4-6. tel. 03-700-0652 である。

研究所創立の日、デットロフ教授は、「ボナヴェントゥラとフランシスコの清貧」と題して記念講演を行った。この講演の中に研究所設立の主旨説明がある。それによると、西洋中世思想の研究において、日本ではトマス・アキナスが極めてよく知られている。しかし同じく十三世紀の代表的スコラ学者であるボナヴェントゥラは殆んど知られていない。だが日本人の霊性を考えると、主知主義的なトマスよりも主意主義的で情操に訴えるところの多いボナヴェントゥラの方がむしろ適合しているように思われる。いずれにせよ、トマスとボナヴェントゥラは共に知られねばならない。なぜなら両者を一緒に把える時、単に一方を知るよりも、はるかに優れた全体像を把握